

## 第六章 佐多町の信仰風土

今年（1996年）2月12日祭りを見るため稲牟礼神社を訪れた。午前10時祭礼は行われたが、神宮の二階氏（宮司の入ヶ町勇氏は怪我で入院中）が氏子代表の入ヶ町正二氏と並び、その前には麓、上之園、瀬戸山、西方、下岩・浮津そして垂水の代表が十名余り並んでの儀式であった。その間、子供を連れて二人の集落の人が来たただけであった。そのあと、入ヶ町勇氏宅でその代表者たちによる直会なおらいがあつて、祭りは終了。他方、新宗教の涅槃城ねはんじょうではバスを連ね、多いときは一度に1000人の信者がやってくる（山本健詞氏談、涅槃城）という。このことは佐多町の現在の信仰事情を物語っているようにみえる。

この報告では細々と守られている神道の姿を(1)「稲牟礼神社」(3)「その他の神社」で示す。(2)「御崎祭り」では各集落の人々や役員の人たちの努力によって祭りが維持されている様子を、(4)「称讚寺しょうさんじと説教場」では佐多町の仏教（浄土系）の現状を、そして(5)「涅槃城」では私たちに馴染みがない宗教と思われるので、その教説を示すことにした。

### 第1節 稲牟礼神社

稲牟礼神社の宮司、入ヶ町勇氏の話をもとにまとめると次のようになろう。入ヶ町氏の話では文献がなく、稲牟礼神社の由来に関してさえも不明であるという。これは私の推測になるが、かつて稲牟礼神社が各集落を統合するかたちで、強力な支配力をもっていたことはほぼ間違いないように思える。その根拠は、第一に、現在の稲牟礼神社を実見すれば明らかなこと。各集落にある神社の境内に比べ、群を抜いて広く、500～600坪の広さをもつ。入ヶ町氏はほぼ2反歩といういい方をする。小さな丘（古代の墳墓を思わせる）を背景にし、さらにその背後は海へと続く一つの景勝の地でもある。第二に、現在なお40町歩の山林を神社が所有していること。おそらく、かつて寄進を受けた山林であろう。今やその管理は林業開発公社と分収林契約を結び、公社が山林の手入れを行い、木材の売り上げを分け合うことになっている。しかし実際は森林組合が公社からの仕事を請負っている。第三に稲牟礼神社の氏子がかつて七集落に及んだ（入ヶ町氏談）ということである。それら七集落には、ほぼそれぞれの神社があるにも拘らず、別に稲牟礼神社が存在したことは、どうしてもそれらを統括していた勢力があったと考える以外、説明がつかないからである。特にその統括する勢力とは氏族出身の麓の集団であろう。その七集落（括弧内はその集落の各神社）とは次のとおりである。

麓（愛宕神社：町役場近くの山にある）

上之園（「あげんそん」と土地の人は発音する）

瀬戸山（本来神社なし、道路沿いに「瀬坂神社」あり。馬頭観音を祭ったものだろうという [入ヶ町氏談]）

- 西方 (大山祇神社：別名山神神社ともいわれる。本来林業，建設関係者の信仰する神社で，「山神祭り」があるという)
- 下岩・浮津 (月形神社：産土(うぶすな)神(がみ))
- 垂水 (馬頭観音がある)

それにもかかわらずなぜ，かつて勢力をもっていた稲牟礼神社が衰退したのか。その理由の一つは明治末期から始まると考えられる，(称讚寺〔後述〕を中心とする) 仏教勢力の拡大によるものと思われる。第二は過疎に伴う氏子の解体によるもの。つまり，稲牟礼神社の中心的存在であった麓の勢力の崩壊によると思われる。上記の七集落は麓と瀬戸山を除き，すべて仏教の壇家となって現在に及んでいるという。このような神道の衰退は後継者難にも及んでいる。入ヶ町氏は大正12年生まれであるが，御子息はまず継ぐまいというのが入ヶ町氏の見方である。入ヶ町氏は上記の神社ばかりでなく，宮司として広く，佐多町の各地の祭りを主催しているようにみえる。のちに述べる「御崎祭り」も入ヶ町氏が中心的な役割を果たしていた。従って入ヶ町氏の後継者がいないことはこれらすべての行事の崩壊を意味する。

入ヶ町氏は昭和47年(50歳ぐらいのとき)で宮司のごんせいがい菅正階の試験を受けて資格を得た。これはさらにせいがい正階，めいかい明階，じょうかい浄階と進むことになる。この宮司の下にちよくかい直階と呼ばれる神官があり，辺塚在住の花里林氏(70歳)はそれにあたる。さらに楽器を奏するれいにん伶人があり，松山氏(松山在住，笛)がそれである。

## 第2節 御崎祭り

御崎祭りとは，佐多岬にある御崎神社からひもろぎ神籬と呼ばれるものに神霊を移し，みこし神輿と共に七つの浦(田尻，大泊，外之浦，古里，竹之浦，間泊，坂元)を越えて，郡にある近津宮神社に移動させる祭りである。現在は2月19日，20日にわたる祭りであり，御崎神社からの移動は19日，各集落を通過，それぞれの神社でお祈りと直会(なおらえ)が行われ，各集落の人々が集まる。そして19日近津宮神社のすぐ近く，旧郡中学校の一画にある仮屋で一晩そこで神輿がおかれて，そこですごす。翌20日は近郷近在の各集落の人々が集まる中で，午前中はそれらの人が飲みかつ歌い，踊り，食事をしたあと，午後にその仮屋から，近津宮神社(現在は二の鳥居が残るだけ)の小高い丘にある本殿まで神輿がかつぎあげられる。その距離は地図上の直線距離では20~30m，実際の距離にしても100mもあるまいと思うところを実にゆっくりねられゆすられ，時間をかけてかつぎあげられる。そのあと，境内で農耕祭の行事があり，その所要時間はほぼ2時間にわたる。この祭りの1つの特色は，先導役にお鉢が，あとずめにはお傘を守る集団がつくことである。お鉢は尾波瀬の青年団，お傘は外之浦の青年団が受け継ぐことになっている。お鉢，お傘はいずれも長さ4.5mに及ぶもので，丸太ほどではないが，太い木に取り付けられている。それを立てても

つものではなく斜めにする。お鉢に関していえば、それを地面すれすれにしてもっていくときがある（近津宮神社二の鳥居前）。その持ち方は次の通りである。腰にゆるめに白晒しを巻き、お鉢と反対の側の竿の端をその白晒しにはさみ込む。持ち手は腰をおとし、胸をそらし、両手で斜めになっているそのお鉢の竿を支えながら、一步一步足を進める、私も晒しを巻き持ってみたが、大人が両手でもって支えるのがようやくの重さ。ベテランはバランスをとりながら片手で持ち、片手を膝におき、かつ中腰になりながら足をはねあげる。もちろん、長い間持つことは出来ないので、長くて10m、断えず交替して運ぶ。従って、先導のお鉢がその速さであるから全体の行列も当然遅くなる。このお鉢の持ち方には口伝がある。親指を他の指とそろえるようにして持つこと。歯を見せるな（口を閉じ、神経を集中せよの意か）である。このお鉢はこの祭りでひどく目立つ存在で、それをどうして通過集落でもない尾波瀬の集落が受け持つことになったのか。そのいきさつは不明である。先端のお鉢の下には横木があり、それには赤、青、黄などの布が垂れ下がり、参拝人はそれを手にしたり、それを頭で受けるのを喜ぶ。残念ながらお傘にはそれがない。すでに述べたように行列は先頭からお鉢集団、次に太鼓を背負った人、花里氏が太鼓をたたき、宮司（入ヶ町氏）が勿をもちそれに続き、そのあと笛の松山氏、そのあとは色とりどりの旗竿を持った集落の人々、そしてお傘の集団が続く。ゆっくりとした歩みとその華麗さは、県内の祭りの中でもっともすばらしいものの1つであろう。しかし残念ながらもはや昔の華やかさを失っているという。たとえば大久保から大泊に至る、いわゆる「浜下り」は多くの人が集まり一つの見せ場で、20年前までは出店が出たという。また古里から坂元に移動するさいに、神輿は山の崖道を下るが、それはかつぎ手が減少したことにより、省略されることになった。平成5年（1993年）の神輿の新調を期に中止された。坂の上から華やかな神輿がみえかくれして降りてくるさまは、風情のあるものだったとのことである。その崖道を坂元から私も逆にあがってみたが、道は狭く、相当数のかつぎ手がいなくて下りとはいえ、無理なことは明らかである。1995年2月17日の祭りの準備から、2月20日までの祭りの様子を私はほぼ一通り見たので、以下、その大略を記しておく。

宮司の入ヶ町氏は2月17日午前10時から祭りの準備に入る。御崎神社に向かって右手の社務所（管理人：大久保栄氏）で行う。主な仕事は「舟かぐら」（舟の御守りとして販売する）と「神籬」（<sup>ひもろぎ</sup>神霊の宿るところ。御崎祭りではこの神霊の宿った「神籬」を郡の近津宮神社に運ぶという特色を持つ）を作ることである。まず「舟かぐら」。約二百本の「みさきしば」（学名不明）の枝を用意し、ヨタレ（四つに垂らすの意）という型の御幣を一つつけたもの。「みさきしば」はこの御崎の海岸地帯だけに自生しているものだという。ヨタレの御幣の作り方は二枚の色紙を裏が内側になるように二つ折りにして、それを半分に切断。それを同方向に重ねて（二組作るため）それに三つの切り目を入れる。その切り目を手前に折り曲げ一番上の袋状のところをこよりを通し、輪を作りその輪をしめて固定する。それをみさきしばの上部に縛りつけて一本の「舟かぐら」が完成する。外が赤にな

るよう赤色の色紙を多く使われるが、それは漁師たちが目立つ赤色を好むからであるという。神籬はみさきしばの枝の形をととのえながら三、四本（本数はきまっていない）の枝の幹の部分の元と上部の二箇所をこよりでしばる。その枝にヨタレの色とりどり（赤、金、青など）の御幣を30ほど取り付ける。そのあと白の和紙で枝の下の幹の部分を含み込むようにして包み、やはりこよりで（元と上部の）二箇所結び付ける。それで出来上がり。これらの作業をすべて宮司の入ヶ町氏がやっておられた。

翌2月18日は役員（集落代表者を含む）だけによる祭礼。午前10時前、御崎神社に集合した役員によって祭礼の準備がなされる。神殿内に供物（魚2匹、野菜〔ニンジン、キュウリ、トマト〕、果物〔リンゴ、ミカン、キーウイ〕、米、餅、コンブ、塩）が供えられ、お礼や「舟かぐら」がバッグに入れられ、祭壇に納められる。これはおはらいを受けるためである。10時、正装した神官3名（入ヶ町、花里、松山の三氏）が神殿内に入る。宮司入ヶ町氏が奥に、並んで太鼓を受け持つ花里氏、その後ろに笛の松山氏が控える。まず花里氏が太鼓をたたいて、開始の合図。神殿内斜め下手に向かって礼拝。お祓。そのお祓をもって出て、今度は宮司（入ヶ町氏）にむかってお祓。それから正面（外に向かって）お祓。お祓を神殿に戻す。花里氏定位置に戻って、太鼓。笛も入る。宮司神殿に進む。より高い段に昇り、そこで礼拝。太鼓・笛の調子が静かにゆっくりとなり終わる。宮司の「祝詞<sup>のりこ</sup>」。その間、花里・松山の両氏は起立して、勿を持ちおじぎの姿勢のまま。宮司「祝詞」を朗々とあげる。そのあと定位置に戻る。花里氏神殿内中央に台を据える。まず宮司がその台に白い御幣の着いた枝（さかきか、みさきしば？）を置いて礼拝。2人の神官も同様に行く。花里氏、役員にそれぞれ白い御幣のついた枝を手渡す。役員一人ずつそれを受け取り、台に置き、拍手<sup>かしわで</sup>を打って礼拝（2礼2拍）最後は全員でそろって礼拝。台が片付けられ、再び花里氏の太鼓。宮司再び神殿奥に入る。その際、太鼓と笛。礼拝して戻る。再び太鼓、宮司終わりを役員に告げる。この儀式は約30分間（10:00~10:30）役員、お供物をさげる（社務所に戻された）。お祓を受けた御守り類（バッグに入れられたもの）が引き出され、同様に社務所に収められる。そのあと神官と役員による直会<sup>なおらい</sup>。この役員はこの祭りでは重要な役割を果たす。代表は大久保栄氏（大泊在住）。すなわち御崎神社奉賛会の中心メンバーで、御崎神社の運営・管理ばかりでなく御崎祭りの実質上の主催者である。奉賛会に所属する会員は1629戸、年会費200円。これは御崎祭りのためにお鉢を受け持つ尾波瀬青年団に18万円、お傘を受け持つ外之浦の青年団へ18万円を補助として、人員の確保のために支払われるため、その総額はそれにも足りない額である。補助金の使い途はそれぞれの青年団にまかされている。過疎化のため、故郷へ祭りのときに呼び戻す費用としても使われているときく（未確認）。この費用を含め、御崎神社としては春に約70万円、秋には約23万円ほどの祭りの費用がかかるという。お賽銭も一つの財源ではあるが、札やその他を売って神社と祭りの維持と運営にあてるため、役員はそのためにボランティアとして、その販売にかりだされるのが実情のようだ。町からの助成は行われていない。

町政と特定の宗教との関連に抵触しないためであるという。また神輿の新調もこの役員たちの働きによるもので、すでに平成5年(1993年)鹿屋の仏壇店を通し、350万円で購入している。

2月19日、この祭りのヤマ場である。通常6時30分に御崎神社を出て、7時田尻到着、そこにすでに大泊の神輿のかつぎ手がやってくる。8時30分大泊着。外之浦の神輿かつぎがやってくる。9時外之浦着、9時すぎ間泊の神輿かつぎが来る。間泊の到着が10時。竹之浦11時そして古里、坂元を経由して最終地点の郡到着は15時頃といわれている。ところが1995年の18日は夜から雨が激しく、祭りが危ぶまれていた。結果的にはほぼ小1時間遅れで無事行われた。すなわち7時神官、はっぴ姿の役員が御崎神社に集合、神殿内での儀式。今回は、太鼓、笛の鳴りもののなか、宮司が一段高い奥に入り、奥の戸を開けたことである。そこが神霊の座するところらしい。そこに神籬を入れ、深くおじぎをし、再び神籬を取り出し戸を閉める。そのとき太鼓・笛はやや激しく鳴らされる。宮司が神籬をもって出て来る。神官全員が神殿の外に出て、神殿を背にして並び、そろって短い祝詞をあげる。そのあと神籬をもった宮司が行列の先頭となってトンネル入口まで山道を昇って歩く、トンネル入口で一台は紅白で飾られた車(無蓋車)が用意されていて、行列一行はそれと他の車に分乗する。田尻へ向かう途中、2度ほど停車し、はるか海をのぞみ、祝詞があげられる。宮司の入ヶ町氏によると、祝詞には一つのパターンがあるらしい。祝詞を山であげる場合には「はるか洋上を眼下に見おろして、この高山から・・・」との語句を入れる。海の見えるところでは「はるか沖合の地平線を見ながら・・・」が入る。

まず第一の到達点は田尻、海岸に沿って広い道路があり船の停泊する田尻港までほぼ続く。御崎神社からの道はこの海岸線に沿った道に出て左折する。田尻の集落は右手方向に集中しており、その左折したところに小さな神社がある。恵比寿堂改築記念之碑(昭和63年5月3日建立)とある。ここから田尻港までの間約1kmが祭り一行の行列がねり歩くところ。まず神社近くの道路沿いの広場(ここは、道路沿いに駐車場としてのかかなり広い空間がある)に神輿がすでに置かれている。そしてここで御崎神社から宮司によってささげてもってこられた神籬が神輿の中へ納められる。神輿は普段、郡の近津宮神社においておく。(近津宮神社の本殿は小さなもの。神輿を置く建物の方が大きい)。そして祭りが近づく1月半ば頃、田尻の公民館に持ってくる。田尻の青年団が清掃して、18日午前中に、この恵比寿神社のこの広場に据えておく。田尻での儀式は次のとおり、尾波瀬のお鉾、外之浦のお傘はすでに田尻に来ている。まずお鉾が置かれている神輿に向けて、鉾の先端をそれに触れるほどに持っていく。そのあと花里氏が2礼2拍、みこしの正面と裏面からお祓、そして正面に戻りおじぎ。宮司正面に座り、祝詞をあげる。そして近くの木にしばりつけておいた神籬を神輿の中に入れる。その間、太鼓・笛が演奏され、人々は神輿にむかってお賽銭をあげる。役員は背中の襟のところに二つ折りにした護符を差し込む。そのあと直会。酒はビール、焼酎、そしてなます大根、おにぎりが配られる。この直会の肴として出

されるものは各集落によってきまっていたようだ。代表的なものは田尻「なます」、大泊「さしみ」、外之浦「貝」（「ころべ」と呼ばれる小粒の貝）そして古里の「にぎりめし」である。私などにも配られ、焼酎を飲まされる。みこしは田尻の青年団がかつぐ。赤、青、黄の旗竿を集落の人と思われる人がそのあと行列となって従う。田尻港まで歩く。田尻港は魚が水揚げされるところでもあり、現在はサタデイ号が2隻停泊しているところでもある。SATA-DAY号はふるさと創生資金5,800万円をもとに1隻8,000万円で購入、現在2隻を所有している。田尻沖の枇榔島周辺の珊瑚礁を見せるための半潜水型水中展望船である。佐多町は町おこしに懸命の努力を払っており、その他、大中尾に約14億8,000万円をかけて、サタデイランド（食堂を中心とするサタデイ館、宿泊施設を含む）を完成させている。この田尻港に車が待機していて、ここで神輿は車に乗せられ次の集落、大久保（途中国民宿舎前に車は停車してちょっとした行事がある）へ。「大久保」は現在ゲートボール場のあるところ。お鉢の先導、神輿をのせる台にお鉢の先が触れるようにする。台に神輿が置かれる。人々はお賽銭をあげる（このお金は集められ、祭りの行事の費用の一部になる）。花里氏のお祈りと祝詞。そのあと宮司の祝詞。直会。ここでは焼酎とわかめ入りなますが肴。

大久保から大泊が「浜下り」と呼ばれ、かつてたいへんに賑わったところであることはすでに述べた。いまなおその名残を私たちは見ることができる。御崎祭りの見せ場の一つである。大泊は約100戸、この地域ではもっとも大きな集落である。漁協があり、大泊の水揚げの場所であるばかりでなく、田尻、間泊の水揚げの集荷場でもある。常時2台のトラックがあつて、8時10分氷を積んで、田尻と間泊の2方向に向けて出発する。そして間泊の車は9時に戻り、田尻の車は9時30分頃に到着する。そのようにして集められた魚は10時鹿屋に向けて出発、11時30分の鹿屋での第一のセリにかけられるとのことであつた。また、ものやそのときの相場によっては（そのために絶えず、相場情報が交換される）鹿兒島市へ直送されるという。この漁協の背後（山側）の道路沿いに津柱<sup>つばしら</sup>神社がある。そして御崎祭りは漁協の広場（海岸）で行われる。また漁協の建物の一部の屋上に恵比寿様が祭られていた。も一つ山の麓に弁天様があるとのことであつた。いまでも祭日には津柱神社、恵比寿様のお祈りのあと、区長さん宅に集まり、飲み会があるとのことであつたが、かつては「カンマン」[神舞]があつて、面をかぶり、脇差しをもって笛と太鼓に合わせて舞ったものだという（田中時男氏談）。いまやそれを舞う人がいないとのことであつた。直会のあと行列をなして大泊の集落をねり歩く。

外之浦は海岸の広場で儀式が行われ、直会は近くの公民館で行われた。部落の人が全員この祭りを楽しむ。集落の山の手より中心に神社があるが、多くの人はその神社の名を知らない。奉納された旗より見ると「氏神社」で祭日は3月18日。この集落は約35戸、1戸を除きすべて「山野」姓である。住民の一人は、平家の落人の子孫であるという。すでに述べたように、御崎祭りのお傘はこの集落の青年団の担当である。直会の肴に出さ

れる「ころべ」という貝はここでしか取れないらしい。小粒だが歯ごたえがあり、肴としてはなかなかいい。

間泊は集落の人口に「蛭子<sup>ひるこ</sup>神社」がある。そこで儀式。この神社は鳥居がない。伝承によると何度も鳥居を作っても倒れるので、そてつを植え鳥居にしたという。だから大きなそてつが鳥居のようになって、鳥居の代わりをしている。また間泊には伝染病が流行することがないという。なぜなら間泊はこの蛭子神社、海岸近くの恵比寿様、山には弁天様、そして早崎鼻の観音様に囲まれているからであるという。この観音様は大時化で種子島に流されたことがあるが、神力によってもとのところに戻った（松元美則氏談）。間泊は約25戸、松元、岩元姓が多い（岡本邦男氏）とのことであった。

竹之浦は約20戸、祭りそのものの儀式は海岸近くの広場で行われた。神社は家々が密集して建つ集落から400m～500m離れた山の側にある。鬼丸神社で祭日は旧3月16日。道路沿いに神社はあるが、道路から神社に行くのに小さな川を渡る。両側に2体の仁王のような石像がある。かなり摩滅しているが、表情豊かで、貴重なものかもしれぬ。神殿内に牛の像三体、馬の像一体。農耕牛馬を祭る神社らしい。岡村氏は馬頭観音という。建立の寄進者の地区を見ると、間泊、古里、郡麓、馬込、松山、坂元、針山、折山、郡上区、岩下、上村とかなり広範囲である。

古里は天乙<sup>てんおつ</sup>神社。祭りの儀式が行われた道路沿いの広場や公民館からは離れた小高い丘に建つ。祭神は不明。祭日は旧9月9日というが、今はすっかりさびれてしまったとのこと。古里は約42戸、しかしここは平地が多く、米どころであることをうかがわせる。古里から坂元へはかつて神輿をかつぎ山道を下る行事があったが、現在はかつぎ手の不足から中止になっている。

坂元では公民館に神輿がおかれ、お祈りと直会。その坂元から郡の仮屋（神輿は郡の近津宮神社には翌日の20日にかつぎ込まれるので、19日はほんの近くの仮屋に据えられる。かつてはその仮屋は、近津宮神社境内のいぬまきの木の所に置かれたが、現在は旧郡中学校の一角がそれにあてられている）まではせいぜい1km。行列を作って仮屋に神輿が運び込まれ、19日の行事はすべて終わる。

2月20日、13時から15時が祭りの本番。しかしすでに午前中に近郊近在から人が集まり、各集落の人はそれぞれの場所で、焼酎を飲み、歌いかつ踊る。近くの集会所を借りるグループ（たとえば外之浦。このグループは青年団はもちろん、婦人会のグループもやってくる）から、旧郡中学校の校庭にゴザを敷き、各集落ごとに輪を作る。神輿が立ち寄ることのなかった集落の人々も集まる。たとえば、針山、浜尻、松山、近くは村上。外之浦グループの婦人会は元気がよく、昨日直会るとき外之浦の公民館でお会いした人たちとここでも再会、踊りを踊って見せてくれた。浜尻グループの一人に浜尻（約25戸）には神社はないのではないかといったら、そんなことはない。道路から10mほどの山よりに、恵比寿神社があるとのことであった。地図には針山に神社があることになっていたが見つけれなかつ

た。かつてはあったが今はなく、郡の近津宮神社に合祀されている（入ヶ町氏）とのことであった。これらの人々をあてこんで古くからハツカイチ（二十日市）が開かれる。昔ほどではないそうであるが、農具、ざる、植木をはじめ屋台が軒を並べていた。市が開かれるのは神社と旧郡中学校の間にある道路沿いである。今は午前中、子供と大人が入り混じっての郡校区内の部落対抗レース（マラソン）が行われている。午後、旧郡中学校のグラウンドでは、ゴザに座っている人たち以外に外之浦のお傘グループ、尾波瀬のお鉾グループが練習に余念がない。ほぼ午後1時最後の祭りが行われる。まず仮屋での儀式、仮屋の入口の注連縄しめなわを一の鳥居とし、近津宮神社の入口が二の鳥居（朱塗りの鳥居で唯一鳥居らしい鳥居）。次にその二の鳥居の内側に神社を背にして宮司（入ヶ町氏）が正座する。お鉾は仮屋からその鳥居に向かう。これからがこの祭りのクライマックス。お鉾は地面すれすれにささげられて進む。二の鳥居の地面から30cmぐらいのところ、御幣のついた縄がはられ、その下を鉾の先が入るように徐々に進む。その縄の内側にいる宮司は、深く伏して鉾の入るのを待つ。鉾先が縄の下をくぐるやいなや、鳥居に張られていた縄はずされる。そして鉾先は徐々に持ち上げられ、宮司の頭を越して立てられる。宮司も徐々に頭を上げていく。歓声があがる。鉾が先導役（前田実氏）に守られ石段をあがる。お鉾のあとは花里氏の太鼓。そして宮司、そのあとを松山氏の笛、次が神輿、ここからは神輿が主役で、もみにもむ。坂で石段が折れて続くのでほんの近い距離であるが苦しいところ。焼酎が神輿にむかってまかれる。神輿のかつぎ手に焼酎をビンから口づけで飲ませる。この神輿の次が旗竿。最後がお傘。神社の境内は高い小さな丘の上で広場になっている（神社は祠に近い小さなもの）。その広場を行列は輪となってぐるぐるまわる。その周りを人がとり囲む。神輿だけがひとりあばれまわる。神殿の入口に注連縄があり、お鉾が再びその下をくぐらせる。お傘も同様に縄の下をくぐらせる。神輿が台に据えられて一休憩。そのあと広場で農耕行事が行われる。牛の耕作。木製の牛を使って行われる。花里氏が牛に対してあれこれ冗談をいう。次に種まき。松山氏、花里氏がそれぞれ行う。多分、稲に見立てられたものだろう。木の枝が用意されるが、それを若者たちが出てきてお互いに引っ張り合い、奪い合う。花里氏が苗がめちゃくちゃになってしまったとの意味のことをいう。そのあと人々に餅がまかれる。最後が花里氏の剣舞。2本の剣が巧みにあやつられる。松山氏の太鼓。それを最後に祭りは終わる。午後3時。

### 第3節 その他の神社

不明なことが多く、記事にできないが、今後の課題としてここに記しておく。

#### 辺塚神社

辺塚（土地の人は「へっか」と発音する）の村山にある。辺塚川（小川）に朱塗りの橋が掛かっていて、それはすでに辺塚神社の境内になる。案内板によれば、昭和24年次の五



社と合祀して「辺塚神社」という。すなわち十三所大明神，枝若宮（若宮），巖島神社（弁財天），鹿兒島神社（八幡様），鎮守神社（熊之細家氏神）である。御神体は鏡，棟札（村山太郎五郎，元亀元年 [1570年]）が残されているらしい。この棟札がどこの神社のものであるかは不明。中郷にある農業研修センターはやや小高い場所にあるが旧鎮守神社があったところという。この神社が熊之細家の氏神であるとする，かつて熊之細家はこの地域での有力者であったのだろう。熊之細と言う小集落があるが，現在せいぜい5，6戸の集落でしかない。上之原には神社はなく，地図に記されていた地点（神社のしるしがある）には経塚と供養塔しかない。野田千尋氏はその著書「佐多岬」で「辺塚川の上流にズゴラ（洞ヶ原）というところがある。ここへ行く途中の中腹に高さ2メートル以上もある二つの供養石と元禄の年号のある高野山，真言宗系の僧侶のお墓が二，三十基ある。」と記している。そしてこの墓に「小石に経文を一字ずつ書いて（一字一石経）埋めたという」こと，その墓はむかし流行病で死んだ平家の落人たちの墓だといわれている，と記している。真言宗系の僧侶と平家の落人との関係，僧侶の墓地が二，三十基もあるとするなら，寺があったとみるほうが常識。それらすべて不明である。

#### 近津宮白佐神社（打詰）

鍋多清光氏（実兄がかつて白佐神社の神主）の話。白佐神社は稲尾岳にある稲尾神社の出先としての神社だという。かつて11月初卯日だったが現在は9月23日に祭りが行われる。その朝，集落の人が集まり清掃，そのあとお参り，そして公民館でお祝いの酒宴。稲尾岳（959m）への道は，昔はくの字形の山道であったが造林され直線道になった。それだけ急勾配となる。二月中旬，道路の整備もかねて，山頂へのお参りがなされるとのこと。片道（登り）約3時間。頂上は見晴らしがまったくきかないとのこと。稲尾神社の御神体は鏡。下の神社（白佐神社）の御神体も鏡だったが，盗難に会う。そのため鍋多氏の実兄が稲尾神社の御神体を自宅に保管することにしたという。したがって鍋多氏本家にそれは今もあるとのこと，打詰集落が平家の落人の子孫ということに関して，鍋多氏は打詰における次の姓は平家の落人の子孫であるという。すなわち，小坂，牧（現在この姓のものはない），姫ヶ迫，そして神田。これはのちに「鍋多」になったという。辺塚は平家の落人部落といわれ，その限りでは，打詰と強い関係があったかも知れぬ。また近津宮白佐神社と郡の近津宮神社との関係には，平氏である祢寝（ねじめ）氏が四代まで郡の山城にいて統治していたことと（野田千尋氏）関連するかもしれぬ。そもそも御崎祭りなるものは祢寝氏の支配勢力と関連しているのかどうか，それも不明である。

#### 第4節 <sup>しょうさん</sup>称讚寺（伊座敷）と説教場（川北）

佐多町伊座敷の中心に，浄土真宗本願寺派（西本願寺に属する），金剛山「称讚寺」がある。住職は三代目で，北村<sup>なつや</sup>龍也氏。明治20年代，説教場として出発したものらしい。そ

して主任は熊本からやってきた（鹿児島別院からの派遣）といわれる。「称讚寺」と呼称されたのは明治三十一年。

初代 北村龍徹（りゅうてつ）

二代 北村源宣（げんせん 昭和31年死去）

現在は三代目の北村龍也氏で、二代目北村源宣氏の娘婿。昭和29年結婚と同時に称讚寺に入り、二代目死去ののち三代目を継ぐ。四代目となる御子息の名は龍史。

現在門徒数1,000戸あまり。佐多町を中心に、根占町に及ぶ。しかし佐多町全部が称讚寺に属するわけではない。大中尾の川北と川南、そして島泊の半数は大谷派。島泊の半分が大谷派であるのは川北と川南の姻戚関係によるものであるという。また上之園（現在校区としては伊座敷に属する）集落にある稲牟礼神社の氏子のグループがあること、瀬戸山もその一つであることはすでに述べた。称讚寺側からいうと、瀬戸山における門徒は10戸。それ以外は神道に属するという。しかし近ごろの流れとして瀬戸山に住む、本来神道に属する家から葬儀を依頼してくる例があるという。門徒代表の立場からは冥加金〔一種の入会金〕と年会費納入を受けてくれなければ、葬儀は行うべきではないとの立場をとっており、住職としては葬儀を依頼されれば・・・との困った立場にあるらしい。

稲牟礼神社の氏子の中心勢力である伊座敷の麓には、出水、知覧のような集落を形成していない。伊座敷の中心に5戸だけがかたまり、あとは周囲に点在する。麓の住人は周囲の人から特別の尊敬を払われたものらしい。鹿間氏（称讚寺門徒代表）は小さいとき魚をもって御機嫌伺いをした記憶があるという。御主人を「旦那さま」、奥さんを「こづさま」（語源不明）と呼んだという。この人たちは地方の知識人で、俳句をたしなんだという（鹿間氏談）。現在、この麓の住人はほとんど伊座敷にはおらず、土地は売りに出されているらしい（山里氏談 称讚寺門徒代表）。かつて魚が取れた頃とは違って、現在の伊座敷の漁業従事者数（専業）は伊座敷10軒、島泊10軒というところ。根占町との境、大川から南、片野坂から伊座敷を中心に島泊までが佐多漁業組合に属す。尾波瀬から田尻、大泊を中心に東へ辺塚（打詰を含む）までは岬漁業組合に属する（山野氏談）。

北村龍也氏によると十月から翌年の二月まで「報恩講」を実施し、各集落をまわり、説教活動をする。そして「お宮参り（11月15日）よりもお寺参り」を心がけているとのこと。この報恩講のやり方は各地区により異なる。各家にまわり、そのあと集会場でお説教、宴会というやり方と、最初から集会場に集まってもらってお説教、宴会となる場合がある。辺塚は平家の落人の子孫といわれるだけあって、「お番役」といわれる人がいたそうである。この人が長い間、寺に代わって葬儀をとりしきってきた。しかし30年ほど前から（伊座敷に通じる）道路ができたこと、お番役の人が絶えたことなどで、葬儀依頼を受けるようになった。また報恩講も依頼されているが、なかなかそこまでまわりきれないのが実情（北村氏談）とのことであった。

地図には「川北」に寺院があるように記されているが、寺院はない。それはおそらく

「大谷派説教場」（東本願寺）を指すものと思われる。この説教場を管理する山口勝巳氏にきく。川北（約40戸）と川南（約20戸）は大正3年（1914年）の桜島大爆発（1月12日）による移住者。桜島、輝北町の人々がこの大中尾（国有地）に入植し、現在の川北、川南の集落を形成した。この人たちは熱心な浄土真宗（東本願寺）の信者たちで、その折り、桜島からもってきたという掛け軸を見せていただいた（説教場内に、新しく表装されて掛けられていた）。一つは親鸞上人の肖像画、も一つは蓮如上人の肖像画で、それぞれ賛がある。現在は年一回北向氏（根占町、大浜にある寺の住職）に来てもらい説教。葬儀も同様をお願いしているとのことであった。維持、管理の費用はすべて「川北」「川南」の住人の年会費でまかなわれており、本山への寄進、北向氏への謝礼などで、かなり苦しい状態とのことであった。

## 第5節 涅槃城（平等大慧会）

これは新宗教「平等大慧会」の一つの仏所で、佐多町の立目崎にある。伊座敷から佐多岬に向けて、西方トンネルを出るとすぐそこに大きな看板が見られる。そこを左折し、その道は立目崎の涅槃城に向かう。大門があり、もっとも目につくのは、長さ33mに及ぶ仰向けの仏像〔涅槃像〕を屋上にもつ涅槃城の建物である。

以下、「新宗教教団・人物事典」（弘文堂）〔以下この書名をさすとき【新宗教】と略称する〕と二度にわたる涅槃城長、永西克行氏との面談、その際いただいたパンフレットをもとにこの宗教の基本的な考え方を記しておく。もとより、ある宗教の思想を叙述することは簡単なことではない。思想は一般に思想家の苦闘の歴史であり、変遷がある。「平等大慧会」は、梅本礼暉誉氏（教主）〔「新宗教」では武志となっている。1910年9月16日生、85歳〕の思想に基づいて昭和29年（1954年）に立教されたものである。この宗派は梅本教主の思想の展開と深くかかわりを持っているように思われる。

まず概観。（「新宗教」による）

〔本部〕〒739-04 広島県佐伯郡大野町字亀ヶ丘700

王舎城（遙拝所、宝殿）

信者数 52万人 教師数 2100人

耆闍崛道場

多宝仏塔（鹿児島県指宿郡開聞町）

涅槃城（鹿児島県肝属郡佐多町）

妙塔（鹿児島県三島村黒村）

次に、この「平等大慧会」の基本的な考え方を私が理解した限りで書き記しておく。不十分なところは不十分なままに書き記し、のちの課題としておきたい。まず第一にいえることは、梅本教主の思想の多様性である。事実「新宗教」には教主が1954年の立教（当時

教主44歳)までに「神道、回教、仏教などの諸教を体験」とあるように、種々の思想が混在している。例えば、中国の陰陽説、「証明」「成就されている」という言葉や「十字」に対する意味づけにキリスト教の影響が見られる。しかし基本は「仏教」で、その世界観として輪廻説をとる。法華経を重視する点で日蓮に共通するが、日蓮はまた他の宗派を激しく非難したことで知られる。しかし梅本教主にはそれはなく、その点に関しては実に大らかである。私が1995年12月に涅槃城を訪れたさいに、食堂にクリスマス・ツリーが飾られていた。山本氏に聞くと本部ではクリスマス・パーティーが行われ、ここの役員も狩り出されたという。ここはここでクリスマス・パーティーが行われるのだという。これは教主の他の宗教に対する基本的姿勢のあらわれであろう。永西氏は、教主が霊友会とかつて関係があったことを口にしたように私には記憶する。「供養」の方式についての考え方は、ここに由来するかも知れぬ。霊友会から別れた一派に石倉保助氏ひきいる「大慧会教団」があるが「平等大慧会」はひょっとすると、それとの関連があるかも知れぬ。

第二にいえることは、経典の中でもっとも重要なものは「法華経」。これに対する徹底的な研究態度が教主の思想の根幹になっている。「新宗教」にも「この経のなかに妙華と法華の両面があることを覚り、妙法華経を著す」とある。私はこの「妙法華経」を読んでいないし、また法華経に対する知識もない。従って、これ以上いうことはできないのが残念である。とにかく梅本氏は法華経を字義どおり解釈すること、そこにすべての真理が隠されているとの信念がある。梅本氏にとって法華経こそ、すべての宗教行為の原点であり、この独自の解釈が、次に述べる予言とその証明のよりどころなのである。

第三にいえることは、予言者として資質を梅本教主が持っていること。「新宗教」にも「この経典と世界観と日本観とは同一」であることから、1945年の日本の敗戦、1950年の朝鮮戦争を予言したことにふれている。つい最近では、1995年1月17日の阪神大震災を予言したといわれる。つまりそれに先立つ1994年12月11日、23日の説法でこれから阿脩羅が荒れ狂うときであること、その阿脩羅とは種々の災難のこと、そのうちのひとつとして地震があげられていたからである。そのような出来事ばかりでなく、例えば鹿児島県開聞町にある「多宝仏塔」の地も、経典を根拠とする教主の予言により発見された地なのである。私は平等大慧会の仏所としてこの多宝仏塔と涅槃城だけを知っているが、当初この教主は美的感覚の持ち主で、かつての高僧のようにあちこちめぐり歩き、これらの地を見出したものと思っていた。しかしそれはちがう。富士山を起点として<sup>さる</sup>申(南西)の方角に多宝仏塔建立の地を求めていたという結果であり、また妙塔はその延長線上にある。そして富士山頂は立教の翌年(1955年)宝塔を建立した場所なのである。この多宝仏塔の発見は、平等大慧会にとって、重要な意味を持つものと思われる。永西氏を通してであるが、教主は、法華経には嘘(方便)と真実が書かれている、と考える。しかし教主の解釈する妙法華経とは真実のみが語られていること、すなわち多宝仏が真実であると証明されている経典とみる。今までの多くの聖人たち、弘法にしろ、日蓮にしろ、はてはイエスにしろ、真

実は知ってはいたが、真実のみを語ったわけではない。今やこの真実を教主は語っているのだという。だから、教主の説くところのお経通りに行動すれば、説かれた通り、あるいはお経通りのことが現実に実現する。まさに多宝仏塔の地の発見は、そのような教主の考えを保証し証明するものなのである。

最後に信者にとってもっとも重要な「供養」について述べる。供養の対象はもっとも大きくいえば、仏を供養すること、それはもろもろの物質を成り立たしめている大宇宙、大自然への供養をも意味する。次は養い親への供養。これは人間にとって食べ物を供給、かつ育ててくれる自然への恵みに対して。もっとも狭いものは生みの親、そして祖先への供養である。しかしこれら供養の背後には次のような考え方がある。

社会的に言えば、これほど文明が進み、人の生活は豊かになったはずなのに、公害や交通事故、あるいは大量殺人を伴う近代戦争に悩む。これはどこか間違っているのではなかろうか。個人のレベルでいえば、たとえば人のために、あるいは子のためにとしたことが結果的に人のためにならず、子のためにならない。これはどこか間違いがあるのではなかろうか。なぜならばよい種子からよい実が結び、悪い種子からは悪い実しか実らないからである（善因縁、悪因縁）。このことに気づかず、またそれをあらためない人は来世において人として生まれかわらない。そのような人は必然的に畜生としての生まれかわりでありえない（輪廻説）。では人が人として生まれかわるためにはどうすればいいのか。一言でいえば知見を得て罪をあやまることである。知見とは王法と仏法を大切に守り保つこと。いいかえれば、「究極の法」によってこの世や前世における自分の犯した罪を知ること、そして「所行の道」によって、それらの誤りをただすこと、つまり「壊したものをもとのものに返す」ことである。より具体的に言えば、地獄、餓鬼、畜生におちないために、四つの仏所で人と共に供養すること、妙法華経をあげて供養することである。王舎城は知見をえて罪をあやまる場所としてあり、多宝塔は妙法華経こそが真実の教えであることを証明する場所として存在する。そして涅槃城は来世において人として生まれることを約束する場所として、つまり本来ならば、餓鬼、畜生に生まれかわるものを、供養を通して人と生まれることを約束する場所として存在するのである。

（細谷章夫）

## 参 考 文 献

- (1) 「佐多岬」 野田千尋 著 淵上印刷株式会社  
1976年6月10日 増補新版発行
- (2) 「新宗教教団・人物事典」  
井上順孝・孝本 貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編 弘文堂  
1996年1月30日発行